「プラトナーの観察」におけるジュール・ラシュリエの空間論

エミール・シャルチエとの議論を中心に

新田 昌英

序

ジュール・ラシュリエ（Jules Lachelier）は19世紀から20世紀にかけてのフランスの哲学界を代表する哲学者の一人である。高等師範学校で教鞭をとった後に視学総監として教育行政の世界に転じ、直接の弟子のみならず同時代の哲学者達に広く影響を与えた。また、現在でもフランスの書店で売られている『哲学辞典』（*Vocabulaire Technique et Critique De La Philosophie*）の初版成立にも深く関わった。

しかしラシュリエの著作は「帰納法の基礎」(Du Fondement de l'Induction)と「心理学と形而上学」(Psychologie et Métaphysique)を除けば現在では広く読まれているとは言い難い。ラシュリエが1903年に発表した論文である「プラトナーの観察」（L'Observation de Platner）は、空間論をめぐってラシュリエがどのようにカントの超越論的感性論を解釈し、彼自身の身体論を展開したかを示している。しかし、後に述べるように、この論文はとくに後半部の論証の難解さゆえに同時代の哲学者達からは皮相的な理解しかされずに批判され、後世の解釈者もできれば深く関わらずに済ませたい破綻した論文と見る向きがあったように思われる。

ところで、この「プラトナーの観察」を題材としてラシュリエと同時代の哲学者が学会発表を行い、ラシュリエ本人を交えて参加者たちが議論した記録が残っている。本論ではこの記録と突き合わせてラシュリエの論文を読んでみたい。首尾一貫した理解を阻む問題を分析し直すことで、なんらかの新しい理解に至る方向が示されることを願いつつ、読み直しは行われる。

1904年1月7日、アルフォンス・ダルリュ（Alphonse Darlu）はフランス哲学会で「延長の観念が視覚のみに起源を持つとする説に関する考察」（Observations sur la thèse d'une origine exclusivement visuelle de l'idée d'étendue）と題した発表を行った。この発表の内容は、前年にラシュリエが『形而上学

道徳評論』に発表した「プラトナーの観察」で提示された説に対する批判であった。ダルリュの発表の要旨とラシュリエ本人を交えての議論の記録はフランス哲学会の会報（以下、「会報」と表記）に残されている。

この文書は20世紀初頭のフランスにおける学術交流の雰囲気を伝える。フランス哲学会は1901年に正式に発足した。第三共和政下で哲学者の大学人化が進むにつれて、職業人としての哲学者の自発的な交流は、学会という枠組みで促進されるようになった。現代につながる哲学研究の制度的な枠組みが作られ始めた時代の哲学者たちの声を、学会の議事録は伝えている。

この議事録はラシュリエのテクストを補完する。ラシュリエは寡作であり、その簡潔かつ稠密な文体は読解が難しいことで知られる。しかしこの会の記録の中では、ラシュリエは自著論文の内容について何度も繰り返して口頭で解説を試みている。

ところで、アランを読む上でもこの文書は興味深い材料を提供してくれる。記録中に本名の「シャルチエ氏」（E. Chartier）の名で登場し、ラシュリエと長い議論を展開するのは、当時34歳のアランである。

このように「会報」は豊かな内容を含むが、その結末は一堂に会した哲学者たちが肝胆相照らすというようなものではない。延長の起源は純粋に視覚的なものであるというラシュリエの説は、発言した哲学者たち全員に批判された。自著論文の解説によってラシュリエは対話の相手と意見の一致を見ようとするが、結果的にはどの相手とも自説を述べ合うだけで物別れに終わっているという読後感が拭いがたい。なぜそうなってしまったのだろうか。

本論では「プラトナーの観察」で展開された所説を検討した後、1904年のラシュリエとシャルチエの議論に焦点を当てる。二人の議論は、ラシュリエが提示する延長の観念にまつわる困難を他の論者の発言よりも具体的に示しているように思われるからである。

「プラトナーの観察」

1903年の論文の概要

エルンスト・プラトナー（Ernst Platner）は18世紀末から19世紀初頭にかけてライプツィヒ大学で生理学を講じた医者で、ライプニッツの流れを汲む哲学者でもあった。プラトナーは『哲学的箴言集』(*Philosophische Aphorismen*)に先天的盲人の観察記録を遺した。これをスコットランドの哲学者ハミルト

ン（William Hamilton）が『形而上学講義』（*Lectures on Metaphysics*）で取り上げたのを皮切りに複数の哲学者や心理学者が論じるようになった[1]。

ラシュリエは1903年の論文でプラトナーの見解を基本的に支持しつつ、独自の解釈を加えた。プラトナーのテクストをラシュリエが自ら訳出した箇所は、2巻本のドイツ語原典のうちでわずか2ページにすぎない。しかしそこで提起されている問題は、ロック（John Locke）が『人間知性論』（*An Essay Concerning Human Understanding*）の第2巻9章で取り上げたモリヌー（Molyneux）の問題としばしば並んで19世紀から20世紀にかけて言及された。モリヌーの問題が思考実験であるのに対し、プラトナーの観察は医者が実際に患者に接して得た記録という体裁を取っているため、それぞれの仕方で自説を補強する実証的な素材として哲学者や心理学者たちはこれを好んで取り上げたようである。

ラシュリエはプラトナーの観察を2点にまとめる。

---

[1] ハミルトンは『形而上学論理学講義』の第28講で、延長の認識は視覚からのみ獲得可能なものか、視覚が触覚と結合して獲得可能なものかという問題について、前者の説を支持する例としてプラトナーの観察を引用する。しかしハミルトン自身はこの問題に関し結論が出なかったことを認める（William Hamilton, *Lectures on Metaphysics*, vol II, Edinburgh and London, William Blackwood and sons, 1877, pp. 174-175）。ラシュリエはプラトナーの観察の先行研究として他にミル（J. Stuart Mill）、リボー（Th. Ribot）、デュナン（Ch. Dunan）、ジェームス（W. James）の論文を挙げている。ミルは『ウィリアム・ハミルトン卿の哲学および彼の著作で論じられる主要な哲学的問題に関する考察』でハミルトンの英訳を引用し、解釈する。延長の認識は同時性の認識であるが、同時性は筋肉感覚（muscular feeling）による継起的な知覚が見かけ上同時的に知覚されるにすぎないとすれば、先天的盲人も視覚像以外は晴眼者とまったく同じ空間認識を持ちうることになる。そうした見地から、視覚は必ずしも同時性の知覚をもたらさないが、同時性の認識を大幅に促進するものとミルは考える（J.S.Mill, *An Examination of Sir Wiliam Hamilton's philosophy and of the principal philosophical questions discussed in his writings*, 4th edition, London, Longmans Green Reade rand Dyer, 1872, pp. 283-287）。リボーは『現代ドイツ心理学』で、空間概念の起源について生得説と獲得説の論争を描き出す。ここでプラトナーの観察を獲得説を補強するものとして紹介している（Théodule Ribot, *La Psychologie Allemande contemporaine*, Paris, Germer Baillière, 1879, pp. 121-122）。デュナンは「視覚空間と触覚空間」の論文でスチュアート・ミルの仏訳から観察を孫引きし、「盲人には晴眼者が持っているような空間の観念が絶対的に欠けている」という自説に確証を与えるものと考える（Charles Dunan, « L'Espace visuel et l'espace tactile : observations sur des aveugles », in *Revue Philosophique de la France et de l'étranger*, Treizième année, 1888, pp. 355-356）。ジェームスは『心理学の原理』にハミルトンの英訳を孫引きで一部引用し、盲人の空間は表面上は晴眼者のそれと大きく異なるが、二つの間には「深遠なアナロジー」があると述べている（William James, *The Principles of Psychology*, Chicago, Encyclopaedia Britanica, 1952, pp. 587-589）。

1. 延長は純粋に視覚的な現象であり、触覚はそれ自身に還元されると、延長に関するいかなる観念ももたらさない。

2. 触角の働きは、一般的な仕方で、何かが外部にあることを伝える。われわれは触覚の質的な差異により、その何かの中に、視覚的に知覚するのと同じくらいの細部を区別することができる[2]。

この2点をラシュリエは承認し、擁護しようとする。それはプラトナーの観察に見られる触覚の概念をラシュリエが独自の仕方で拡張し、それに従ってプラトナー説を再解釈した後でなされる。

ラシュリエによればプラトナーは触覚（tact）という概念の中に複数の概念を混同している。触覚は外部の物体から来る抵抗の感覚と、自己の身体の運動の感覚に分けられ、プラトナーはとくに後者の感覚を見落としていた。これはキネステーゼ（sensation kinesthésique[3]）と呼ばれ、「運動器官の作用に付随し、あらゆる空間的直観に先立って、自己のある運動を他の運動から内的に区別できるようにする[4]」感覚である。

ラシュリエは触覚をさらに4つの要素に分類する。

1. 外的な抵抗（résistance externe）
2. 触覚の感覚質（qualités tactiles）
3. 内的抵抗（résistance interne）
4. 様々な形態の筋肉感覚、または一般的にキネステーゼ（différentes formes de la sensation musculaire, ou en général, kinesthésique）

このように触覚を分類した後で、プラトナーの観察は以下のように再解釈される。

---

[2] Lachelier, « L'Observation de Platner », in *Revue de Métaphysique et de Morale,* 1903, p. 681.

[3] 「内的運動感覚」と訳されることのあるこの語はギリシア語の「動く」という意味の動詞 kinein と「感覚」という意味の名詞 aisthesis を合わせた造語で、1880年にイギリスの神経学者バスティアン（H. Charlton Bastian）が著書 *The Brain as an organ of mind* の中で初めて使ったとされる。同書のフランス語版は1888年に出版されているが、ラシュリエがいずれかの版を参照した上でこの語を採用したかどうかは確認できなかった。いずれにせよ、それまで 'sixth sense'などと呼び習わされてきたこの感覚について、哲学の術語としては当時はまだ新しかったものをラシュリエは採用したことになる。（Cf. D.I. McCloskey, « Kinesthetic Sensibility », in *Physiological Reviews*, vol. 58, No. 4, October, Bethesda, The American Physiological Society, 1978, pp. 763-764.）

[4] Lachelier, *op. cit*, p. 682.

1. 延長は純粋に視覚的な現象であり、身体器官の抵抗と外的な抵抗、触覚とキネステーゼからはこの現象についていかなる観念も得られない。

2. 抵抗の感覚は、それがいかなるものであれ、外部に何かがあることを教える。キネステーゼは内的抵抗の感覚と結合し、様々な運動器官とその各器官の運動を直接的に認識させる。触覚は外的抵抗の感覚と結合し、それにより、視覚的に知覚した場合と同じくらいの細部を外部の物体（および外部にあるとみなされた自己の身体）において区別することができる。

命題を提示した後にはその妥当性に関する論証が続くことになる。先回りしてラシュリエの結論を見ておくと、上記2つの命題を論証することにより、延長は純粋に視覚的であって触覚的なものでないとすれば、「それ自体で存在する物体というものはない」ことになるという。この結論は1885年初出の論文「心理学と形而上学」で示された観念論的な立場によく調和する。すでにラシュリエは、「あらゆる真理と実在の最後の支点は、精神の絶対的な自発性である[5]」と述べていた。つまり、「プラトナーの観察」で延長の観念と触覚知覚についての論証を通じて期待されていたのは、再び心理学的な問題に立ち入りつつ観念論に傍証を与えることであったといえるだろう[6]。その論証がどのように行われたかを見ていく。

ラシュリエによる論証

ラシュリエにとってのプラトナー説の論証は、大きく2つに分かれる。まず外的対象の形態と場所の認識が視覚によらずに触覚だけで可能であることが、冒頭で精緻化された触覚の概念を用いて説明される。そのうえで触覚の知覚と視覚による延長の知覚が異質である説が提示される。次に世界の（知覚の）無限性を論ずることによって、外的対象は延長と実在性を持たないことが証明される。

何かが外部にあるということは、それが私に抵抗の感覚を与えることから知られる。それはある意識の状態から他の状態へ移行しようとして、それを妨げるものを見出すことである。すなわち、外部の対象とは、意志の完遂を

---

[5] Lachelier, « Psychologie et Métaphysique », in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, Dixième année, Volume II, 1885, p. 509.

[6] ラシュリエの観念論的な立場と「プラトナーの観察」との関連については、Cf. Gaston Mauchassat, *L'Idéalisme de Lachelier*, Paris, Presses Universitaires de France, 1961, pp. 146-152.

遅らせ、妨げるもの、意識としての私の現実と拮抗するもうひとつの現実として現れてくる[7]。

対象の外部性を識別する根拠をラシュリエは「抵抗の類」（genres de résistance）の区別のうちに見出す。私の身体器官の状態を伝えるキネステーゼが常に一定の強度を維持し、私に最も近いものとして感じられる限りで、様々に変化するもうひとつの抵抗の感覚は私にとって付帯的なもの、より表層的なものとして認識される。これは純粋に動的な関係（relation dynamique）においてのみ把握される事柄で、空間に関する直観（intuition spatiale）の介在を必要としない。

対象の形態と位置の認識は上記の触覚知覚に方位付けと時間性を与えることで説明される。プラトナーの観察では、先天的盲人において時間が空間の役割を果たしていることが指摘された。遠い／近いという概念は、先天的盲人においては、ある触覚知覚から他の触覚知覚へ移るときに要する時間の間隔が長い／短いということ以上のものではない[8]。この指摘を受けてラシュリエは奥行きの知覚を直線上を歩く時間の間隔で説明する。

上下、前後、左右の方位付けもまた空間の表象を介在させずに身体の自発的な運動から説明される。

> われわれのうちには、あらゆる随意運動に先立って、覚醒時にはほぼ中断のない本能的な努力がある。それによってわれわれは頭と身体の少なくとも一部分を重力に逆らって地面から上向きに維持している[9]。

このように視覚とは無関係で身体運動の感覚に起源を持つ認識は、視覚の表象と結合されることによって晴眼者の対象認識を作ることになるが、その結合に視覚が優先的な役割を果たすわけではない。

> 順序に関しては、確かに触覚の各々がわれわれの意識において前後に位置づけられる。しかし一方向にのみ並んだこの時間的な前と後からは、いわば何らかの1点の周囲に無数の方向へ伸びていく空間内での前と後の観念は得られない。これらの時間的関係を空間的な関係と思わせるのは、視覚的な所与を触覚的な所与に結合する習慣に過ぎない[10]。

---

[7] Lachelier, « L'Observation de Platner », in *Revue de Métaphysique et de Morale,* pp. 682-683.
[8] *Ibid.*, p. 680.
[9] *Ibid.*, p. 692.
[10] *Ibid.*, pp. 686-687. この文は1907年出版の論文集では次のように書き換えられ、キネ

晴眼者の知覚に視覚と触覚という2つの所与の異質性を認め、両者の結合には必然的関係を認めない。そのようなしかたで対象の知覚において中心的な役割を担わされるキネステーゼとは対照的に、延長の観念には非本来的な外部性が強調される。

> […] 延長であるものは、それが延長でしかない場合、外観が現実の外部にあるのと同様に、われわれの外部にある[11]。

延長は意識で経験される限りにおいてのみ存在する現象であり、物質的な存在自体の属性ではない。このことは論文の最後に無限をめぐる議論の中で触れられる。

論文は次のような一文で終わる。

> 要するに、もしプラトナーが正しく、触覚的な延長はないとすると、それ自体で存在する物体はないのであり、もし、ライプニッツが考えたように、存在の複数性とその細部が無限に至り、同様にライプニッツが考えたように、現存する数的な無限性はないとすると、それ自体で存在する物質的世界という仮説は矛盾しており不可能である[12]。

プラトナーに言及した前半部分は、上で見たように、外的対象はキネステーゼと内的抵抗の組み合わせで認識可能であり、延長の観念を必要としないことに関わる。延長の観念は視覚のみに依存する、いわば人間の側にのみあるもので、外的対象の認識が触覚のみで可能であることが証明されると、延長実体としての物体は存在しない。後半部分は、ラシュリエがライプニッツの思想に寄り添いながら無限の認識と実在性を論じた箇所のまとめになっている。

ステーゼから延長の観念へ必然的に導かれる理由はないことがより詳しく説明される。「順序に関しては、確かに触覚の各々がわれわれの意識において前後に位置づけられる。しかし1方向にのみ並んだこの時間的な前と後からは、いわば何らかの1点の周囲に無数の方向へ伸びていく空間内での前と後の観念は得られない。おそらく、私の手の運動に付随するキネステーゼは、私が手を右、左、前、後ろへ動かすに従って変化する。しかしこれらの純粋に質的な差異からはそれ自体で延長の観念とその延長における様々な感覚は得られない。それらの差異が私にとって空間的な意味を持つのは、私が空間の何であるかをすでに他所で知っている限りにおいてである。」(下線は引用者) Lachelier, « L'Observation de Platner », in *Études sur le syllogisme, suivi de l'Observation de Platner et d'une Note sur le « Philèbe »*, *op. cit*, p. 111.

[11] Lachelier, « L'Observation de Platner », p. 683.

[12] *Ibid.*, p. 702.

大きさが一定である現実世界の物体と、大きさが可変である外観の区別からラシュリエは説き起こす。人間に親しいのは外観の世界のみであり、それは物体に視覚イメージの延長を付与したものである。

外観の世界はさまざまな視点から無限に異なる仕方で表象される[13]。同じ一つの意識に与えられるものの全てが有限であるとしても、各瞬間ごとに、さらに他の個別の意識にとって世界の表れ方は無限である。また、望遠鏡の倍率を上げると空に見える星の数が増えるように、人間の認識能力の変化に伴い世界内の物体の数は無限に増えるように見える。しかし人間は世界をあるがままには表象できないので、そこから物体それ自体の無限性を結論づけることはできない。仮にひとつの同じ意識が知覚する対象の数が無限であるとしても、人間は現にそれらを全体として知覚することしかできない。そのようなことが可能であるためには、知覚の対象の数が有限でなくてはならないであろう。したがって世界の無限性が不可能であるか、世界の実在が不可能であるかの２つに１つである。ある物体をより小さな構成部分に分割する場合も同様である。ある物体が無限に分割ができるということは、物自体の数が無限であることの証明にはならない。それはより詳細な認識が将来的に可能だろうという知覚の水準での可能性にすぎない。物自体が認識できないのであれば、無限の世界が実在すると人間が断言できる可能性はない。

触覚の分析と空間認識を扱った前半部分と比較すると、結論の後半部分は明らかに異質な論点を含んでいる。延長の観念の起源が視覚にあることを証明するのにこの議論は何の関係があるのか。そもそもこの部分は必要だったのだろうか。ラシュリエの哲学をその全体にわたって『ラシュリエの観念論』(*L'Idéalisme de Lachelier*) で綿密周到に検討したモシャサ (Mauchassat) は、ここでのラシュリエの論法について「おそらく、お気づきの通り、 論証ができたというにはほど遠い」と述べている[14]。

しかし哲学会でのラシュリエの発言と論文を突き合わせると、無限に関する後半の議論は、延長の概念について補足し、延長の実在性が否定されるの

---

[13] 視点の局在性と無限をからめて存在論的に扱うとき、ラシュリエの念頭にあったのは例えばライプニッツの次のような議論であろう。「おなじ町でも異なった方角から眺めると、まったく別な町に見えるから、ちょうど見晴らしの数だけ町があるようなものであるが、同様に、単一な実体の無限の数を考えると、おなじ数だけのあい異なった宇宙が存在していることになる。しかしそれは、ただ一つしかない宇宙を、各モナドのそれぞれの視点から眺めたさい、そこに生ずるさまざまな眺望にほかならない。」（ライプニッツ 『モナドロジー』55 清水富雄、竹田篤司訳 中央公論社 2005）

[14] Mauchassat, *op.cit.*, p. 149.

を確認することでプラトナーの観察を補強していることがわかってくる。無限に関する議論の意義を理解するためには、ラシュリエが延長という言葉でそもそも何を意味しているのか、それが空間とどのように違うのかを理解する必要がある。哲学会でのラシュリエとシャルチエの議論は、2 つの概念の違いを理解することの難しさを具体的に示すと同時に、理解への鍵を含んでいる。

ラシュリエとシャルチエの議論

1904 年の哲学会ではダルリュとラシュリエの質疑応答が一段落したところでシャルチエが発言する。彼がラシュリエの所説でまず問題としたのは、他の哲学者たちと同様に、他の感覚に対する視覚の特権性であった。

盲人は触覚に還元されるものではなく、聴覚を持ち、両者の組み合わせで空間の認識に至ることができる。嗅覚も遠隔的接触の器官であることを考えれば、嗅覚でも同様の認識に至ることが可能であり、そのようにして認識される空間は「嗅覚的空間でも触覚的空間でもなく、付加形容詞なしの、唯一の空間[15]」である。シャルチエは知覚認識における直観の包括性と空間の普遍性を強調する。

> […] 宇宙は部分に先立って与えられる一個の全体です。しかしそれは眼だけが与えるものではありません。つまり盲人の生活はプラトナーの観察が教えるところよりもずっと豊かであり、次のように考えるのが妥当です。盲人が幾何学について語るとき、彼は私たちと同様に唯一の空間を考えており、それは私たちのすべての感官に共通のもので、私たちのすべての感覚を結びつけるものであり、あらゆるところで、万人にとって同じであり、複数の感官によって唯一の対象、唯一の世界を認識するための定式であると。

ここでシャルチエは空間（espace）の認識における視覚の特権性を批判している。ラシュリエが主張したのは延長（étendue）の観念獲得における視覚の特権性であり、空間の認識とは区別されていることにシャルチエは気づいていない。そのために二人の議論は平行線を辿りはじめる。すなわち、視覚以外の感官でも空間の認識が可能であることをシャルチエが手を変え品を変え

[15] *Bulletin de la Société Française de Philosophie*, quatrième année, Paris, Société Française de Philosophie, 1904, p. 59.

て証明して見せると、それは視覚の介入なしにキネステーゼだけで獲得が可能な認識だとラシュリエが指摘するやりとりが繰り返されるのである。

議論の途中でシャルチエはこの事態に気づき、延長という言葉を意識的に使い始める[16]。しかしラシュリエにとってその用法は自身が空間と呼んでいるものにまだ近いと確信し、議論の終盤になって指摘する。

> どうもシャルチエ氏はいままでおっしゃったことの全てで、私なら空間と呼びたく思うもの、つまり何らかの感覚についての位置や距離の関係の総体のことを延長と呼んでいるようです[17]。

延長と空間の区別についてラシュリエは次のように補足する。

> […] 盲人と晴眼者は同じ空間に生きているといえます。ただこの空間は晴眼者においてのみ延長の形態をとるのです[18]。

これを受けて、シャルチエは視覚空間の概念を説明する必要があるという。ラシュリエは二人が意見の一致に至ったようであると判断し、彼の自説の要約を繰り返したところで二人の議論は終わる。

> シャルチエ氏と私はほとんど了解するところまで来ているように思います。私が思うに、視覚なしで延長はない。しかし運動の意識がなければこの延長の中に部位、位置、距離、つまり狭義の空間であるものは何もないでしょう。

二人の議論をここまで追ってくると、はたしてシャルチエはラシュリエのいう空間と延長の区別を理解したのだろうかという疑問が残る。「会報」にはこれ以降シャルチエの発言は記録されていない。判断なしに空間認識はないという旨の発言が最後である。ラシュリエが「空間と呼びたく思うもの」

---

[16] Cf. *op.cit.* pp. 63-65. シャルチエの発言部分。

[17] *Ibid.*, p. 65.

[18] *Loc. cit.*

本論では « étendue »を一貫して「延長」と訳したが、このフランス語は哲学の術語である前に、知覚される空間、見える空間という意味合いで「ひろがり」とでも訳すべき日常の語彙でもある。ともに哲学の教師であったラシュリエとシャルチエが術語としての « étendue »の用法を知らないはずはなかったであろう。しかしこの引用のように「延長」よりは「ひろがり」と訳した方が素直に理解しやすい箇所が散見される。二人の議論において「延長」は議論の便宜のために使われる既成の概念であるに留まらず、日常的に知覚される「ひろがり」でもあり、生成途上の概念である可能性に思いを致すべきであろう。

以外の意味でシャルチエが延長を理解したことを示す痕跡はない。理解を阻む原因はどこに求めるべきだろうか。

それはラシュリエの用語法と、彼の直面した言語表象に関する困難にある。すでにダルリュとの議論の中でラシュリエは延長の観念について説明していた。

> ［延長は］ある種の造形素材であり、描画または創造可能な空間のあらゆる形を支持し、満たし、無限にあふれさせるものです。一言で言えば、あらゆる規定において現勢態以前の可能態であり、部分以前の全体です。
>
> 私が思うに、視覚から得られ触覚からは得られないのは、このように理解され、単純な空間図式から区別した延長です[19]。

こうした延長の観念は、カントが超越論的感性論で規定した空間の条件を満たすとラシュリエ自身が述べている。

> 視覚から与えられたままの延長は、カントが空間と呼ぶものに帰した一見矛盾する２つの条件を完全に満たすことを指摘しておきます。超越論的感性論によれば、空間は無限の与えられた大きさであり、アンチノミーの議論の中で、この同じ空間はそこに新しい対象を置くのに従って我々の前に拡がり、有限と思われる世界を超えてそれ自体では知覚されないものです[20]。

延長についてのラシュリエの説明が分かりにくい理由は、彼の用語法のこうした錯綜にある。空間、あるいは延長の唯一性を説くシャルチエは議論の中でカントの『プロレゴメナ』を引き合いに出し、空間概念について二人の理解を確認しようとした[21]。カントによれば、空間は諸現象の可能性の条件となるア・プリオリで必然的な表象である。空間は純粋直観であるがゆえに唯

---

[19] *Bulletin de la Société Française de Philosophie*, p. 54.

[20] *Ibid.*, p. 56.（傍点引用者）「空間は無限の与えられた大きさとして表象される。ところで、人はなるほどそれぞれの概念を、無数のさまざまの可能的な諸表象のうちに（それらの共通的徴表として）含まれているところの、したがってそれらの無数の諸表象をおのれ自身のもとに含むところの、一つの表象として思考するにちがいない。しかしいかなる概念も、一つの概念としては、あたかもその概念が無数の諸表象をおのれ自身のうちに含むかのように、そのように思考されることはできない。それにもかかわらず空間はそのように表象されるのである（なぜなら、無限に分割された空間のすべての諸部分は同時に存在するからである）。それゆえ空間についての根源的表象はア・プリオリな直観であって、だから概念ではない。」（『純粋理性批判』BII40 原佑訳 理想社 1966）

[21] *Ibid.*, p. 63.

一のものとして表象される[22]。「盲人と晴眼者は同じ空間に生きている」というラシュリエは空間の唯一性を承認する。しかしそのような意味での直観としての空間は、キネステーゼを主とした触覚から獲得できる「キネステーゼ空間」（l'espace kinesthésique）とでも呼ぶべきものであり、盲人は「延長なき空間」（l'espace sans étendue）で自己の感覚を位置づけるのだという[23]。

ラシュリエによるこうした補足はよく理解されなかったようである。哲学会での議論に参加した哲学者のうちでダルリュとシャルチエは視覚の特権性を批判した。しかし「延長なき空間」から区別される延長という言葉でラシュリエがそもそも何を言おうとしているのかを誰も問題にしなかった。上で見たように、ラシュリエは延長の観念がカントの空間と同じであることを認める趣旨の発言をした。その結果、ア・プリオリな純粋直観である空間が視覚によってしか得られないとラシュリエが主張しているかのように理解され、批判された。ラシュリエにとって自説のこのような解釈は誤解であったが、誤解を招く素地は錯綜した用語法にあり、延長を言語で表象することの難しさにあっただろう。それではラシュリエのいう延長とはどのようなものか。

延長は関係としてとらえられる空間図式（schème spatiale）ではない。ある点を 3 次元の座標上に定位する操作は、ラシュリエによればキネステーゼのみで可能である[24]。

延長は、関係論的な空間に可能態としての無限性を付加し、空間を所与の全体として表象することを可能にする観念である。視覚が延長観念の特権的な器官であることの根拠を、ラシュリエは視覚による身体感覚の強力な記号化作用とでもいうべきものに求める。

> 視覚により、そして視覚と運動の意識の協働により、私は外延的な数量の世界に入り、この世界は私の感性と運動性が後になって産み出したものなのですが、

---

[22] カントにおいて空間の唯一性は自己の唯一性と表裏一体であると田山令史は指摘する。カントの空間論については、以下の論文から学ぶところが大きかった。田山令史「空間と幾何学」『現代カント研究 4』カント研究会編 晃洋書房 1993.

[23] *Bulletin de la Société Française de Philosophie*, p. 58.

[24] 空間における方位づけの起源を、ラシュリエは論文中で重力に抗して直立する人間の自発的な運動に求めた。このことはカントが空間の方位づけに常に「私」を入れて考えていたことと対応する。『純粋理性批判』を発表する前に書いた論文「空間における方位の区別の第一根拠について」(*Von dem ersten Grunde des Untershiedes der Gegenden im Raume*, 1768）の中で、カントは身体の「右側と左側との異なった感情」（das verschiedene Gefühl der rechten und linken）を引き合いに出しつつ空間の方位づけを語る。ラシュリエにおいてはこれがキネステーゼという（当時としては）現代的な表現になる。

この世界が私にとっては真実で唯一のものになり、先行するものはすべてこの世界の表現と外観にすぎないものとなります、他方、逆に、この世界の中に感覚の現実的なものは解消して知解可能なものとなるのです[25]。

「プラトナーの観察」でラシュリエが述べるところによれば、外的対象の位置関係はそれらを触覚で認識するためにかかる時間の間隔で説明できる。それが一般的に空間的な関係と考えられるのは、「視覚的な所与を触覚的な所与に結合する習慣」による。こうした感覚的所与の異種結合は、ある視覚像が特定の触覚を表すという記号論的な関係のもとで成立する。視覚像というシニフィアンが先天的に欠けていればこの関係は成立しようがない。

視覚によるこのような関係の認識は、時間の間隔という継起的な認識から外的対象相互の同時的な位置関係を認識するという知的操作のさらにメタレベルの認識として得られる。こうした認識から形成される観念をラシュリエは延長と呼んだ。それは確かに「無限の与えられた大きさ」を持ち、無数の諸表象をおのれ自身のもとに含むものとして表象されるという意味で、カント空間と矛盾しないものであった。しかしカントは超越論的感性論の中で延長と空間という区別を注意を喚起する形で積極的に用いているわけではないので、ラシュリエの用語法は誤解を招くことになった。

結び：無限に関する議論が意味すること

ラシュリエ論文の結論部に戻ろう。1904 年の議論でラシュリエが語ったことを考慮しつつ世界の無限と実在性に関する議論を読むと、この箇所は、視覚認識により延長的なものとして解される世界の実在性を否定するための補論であることがわかる。新しい対象を置くのに従って我々の前に拡がる延長的世界は、可能態としての無限の知覚を喚起する。しかし物自体を認識する可能性を絶たれている人間は、知覚の無限性から実体の無限性を結論する権利を持たない。また、延長的世界が与える無限の広がりの感覚は、触覚による身体感覚の認識に屋上階を重ねた表現の関係としての認識にすぎない。したがって、視覚的な世界の認識も触覚的な世界の認識と同様に空間の理念性を示している。

---

[25] *Bulletin de la Société Française de Philosophie*, p. 68.

付録：「プラトナーの観察」抄訳

ラシュリエが訳出したテクストは *Ernst Platners Philosophische Aphorismen : nebst einigen Anleitungen zur philosophischen Geschichte*, Theil 1, Leipzig, Schwickert 1793, pp. 440-441.である。試訳作成にあたりドイツ語原文とハミルトンの英訳（William Hamilton, *Lectures on Metaphysics and logic*, vol 2, Edinburgh and London, William Blackwood and sons, 6th edition, 1877, pp. 174-175.）を参照したが、用語法と文の区切りはラシュリエの仏訳に従った。したがって、以下はプラトナーのテクストを実質的にはラシュリエの仏訳から重訳したものである。( ) による挿入はラシュリエの訳文にあるもの、〔 〕による挿入部分は筆者による補足、注は全てラシュリエによる訳注をそのまま訳出したものである。

「視覚の助けなしに我々が空間と延長の観念を自ら形成できるという観念については（§f, p.181, sqq.）、（1785 年から）一定の方法に基づいて特に意見の分かれる点に関して行い、全 3 週間にわたって続けた先天的盲人の観察により、視覚はそれ自体に還元されると、延長と空間に関することが全くわからないこと、ある事物に関して、それが他の事物の外部にあるということがどういうことかわからないこと、一言で言えば、視覚を失った人間は、感覚する主体から区別され、それに作用する能動的な原理の存在（それを事物または印象というべきだろうか？）と、その存在とともに単純な複数性の存在〔を知覚する〕以外には、外部の世界を全く知覚しないことを確信した（ここで私の結論は、ヘッセの論文集の第 1 分冊、p. 119 におけるティードマン氏の「形而上学の本性について」と一致している）[1]。実際、先天的盲人にとって空間の機能を果たしているのは時間である。先天的盲人にとって遠隔と近接は、時間の長短、すなわちある触覚から他の触覚へ移行するのに必要な間隔の数の大小にほかならない。先天的盲人は晴眼者と同じ言葉を話すために誤解を招きやすく、私自身も調査を始めた頃には誤解していたのであるが、実際には先天的盲人は外部の事物相互の概念を全く持っておらず、（この点

[1] *Hessische Beiträge zur Gelehrsamkeit und Kunst* は大半が初出の論文を収めた季刊の論文集であった。ティードマンの論文 *Ueber die Natur der Metaphysik; zur Prüfung von Hrn Professor Kants Grundsätzen* は第 1 分冊（1785 年号の合巻の p. 113 以降）から始まり、第 2、第 3 分冊まで続く（p. 233、p. 464 以降）。しかし実際には、引用箇所のティードマンの思想はプラトナーの思想と著しく異なるように思われる。

について私の観察は決定的なものと思われたのだが）物体および物体と接触する身体の部位が触覚の神経に別個の印象を与えない場合は、先天的盲人は外部にあるもの全てを自分に継続的な作用を及ぼす1個のものと思うであろう、例えば、彼がある表面に手を触れる時には、その作用は指1本だけで触れる時より強いものとなり、ある表面を手でかする時または足で通過する時にはより弱い作用となる[2]。先天的盲人が自己の身体で頭と足を区別するのは、これら2つの部位を分ける距離によってでは全くなく、各部位から来て、彼が信じがたいほどの繊細さで差異を認める触覚によって、さらに時間の助けによって[3]のみである。自己の身体以外の物体に関しても同様であり、先天的盲人はその形態を触覚印象の種類によってのみ識別する。例えば立方体は、球体とは異なる仕方で触覚に作用する角と頂点によって識別する。」

---

[2] ハミルトンはこの文の最後の部分を訳出していない。この部分には不満だったのであろう。筆者はテクストにそのまま従った。しかし（*oder* ではなく）*als bei dem Schreiten der Füsse* と読みたくはなる。そうするとフランス語では（「または」ではなく）「足で通過する時よりも」となるであろう。

[3] すなわち、先天的盲人が一方の部位から他方の部位へ触覚的に移行するのに要する時間によって。